

論文の和文要旨	
論文題目	日本語のモノと場の二者関係の概念化と 自動詞・他動詞構文に関する研究
氏名	小柳 昇

本論文は、モノと場の二者関係に注目し、その概念化という視点から現代日本語の自動詞文と他動詞文の構文交替現象を分析する。それによってモノとモノの二者関係だけでは捉えられなかった他動詞構文の存在を示し、その生成メカニズムを明らかにする。

これまで自他動詞の構文交替は、(1a-b) に示すような他動詞文の目的語が自動詞文の主語になる使役起動交替が中心だった。これはモノとモノの使役連鎖に注目して事象を把握することを意味する。しかし、日本語の構文交替現象は、この把握だけでは不十分である。例えば (2a-b) はそのことを示している。

- (1) a. 太郎 (x) がコップ (y) を割った。
- b. コップ (y) が割れた。
- (2) a. 柳の木 (z) に芽 (y) が出た。
- b. 柳の木 (z) が芽 (y) を出した。

表 1

	事象 (因果連鎖)	意味と構文
(1) a	$x \Rightarrow y \rightarrow y'$	①使役変化を表す他動詞構文
(1) b	$y \rightarrow y'$	②対象変化を表す自動詞構文
(2) a	$-/z \rightarrow y/z$	②対象変化を表す自動詞構文
(2) b	$-/z \rightarrow y/z$	③ ? 他動詞構文

※「 $\Rightarrow$ 」は使役を、「 $\rightarrow$ 」は変化を示す。「 $y/z$ 」は「z に y がある」ことを示す。

表 1 に示したように、(1a-b) の事象は①使役変化他動詞構文と②対象変化自動詞構文によって表される。しかし、(2a-b) は (1) と平行的に考えることはできない。どちらも ‘-/z’ から ‘y/z’ への変化を表している点では同じだからである。この構文交替は、場 (z) とモノ (y) の二者関係の事態把握においてどちらに焦点を当てて叙述するかの違いによると言える。つまり、(2a) は対象 (y) の変化に焦点があたり ( $-/z \rightarrow \boxed{y}/z$ )、(2b) は場 (z) の変化に焦点があたっている ( $-/z \rightarrow y/\boxed{z}$ )。本論文は、このモノと場の二者関係の概念

化の違いに注目し、表1の「？」に入る③の構文を場の変化を表す「場焦点化他動詞構文」と呼ぶ。そして、この構文が日本語の他動詞構文のさまざまなところに現れることを明らかにする。各章の内容を要約すると以下のとおりになる。

第2章では、自動詞（構文）と他動詞（構文）に関係する先行研究を概観しながら、この③の視点の欠如を指摘し、本論文の立場を示す。

第3章では、③の場焦点化他動詞構文を分析するための理論的な枠組みと分析のアプローチを示す。モノと場の二者関係の基本的な概念化は存在と所有であると考え、「場が、そこにモノが存在することによって特徴付けられる」と把握されることによって存在から所有の概念に転換すると規定される。そして、所有の概念は単に「ある（いる）」「持つ」のような所有動詞として概念化するのみならず、外界の事象の把握の＜鋳型＞になると主張する。所有の概念化が鋳型となる事態認知モデルとして、受ける側（ナル側）の視点から事態を把握するモデルを提案し、その鋳型を通じて生まれるのが③の場焦点化他動詞構文であると分析される。

第4章ではこの認知モデルに基づいて、③の構文が主に二つの観点から分類され分析される。一つは静的な所有から動的な所有へと拡張するという観点である。動的な所有とは、動的な事象が所有という＜鋳型＞のよって概念化されることを指す。モノがそこにある原因として動的な事象が読み込まれて、場がモノを所有しない状態から所有する状態へと変化すると把握されることである。もう一つは、把握事態のどこが焦点化されるかという観点である。本論文が提案するモデルは受ける側の視点に立った事態認知モデルだが、スル側の視点に立った事態認知モデルとの＜接点＞および＜融合＞にも注目する。使役主や外部の原因が存在しながら、場の変化のみに焦点があたって成立する他動詞文も③の構文として分析される。自律的な変化事象のみのⅠ型、使役主が存在しているが変化事象が焦点化するⅡ型、再帰構造の変化事象が焦点化するⅢ型の三つに分類される。

(3) 静的な所有

・戦争は莫大な費用を要する。

(4) 動的な所有（左は読み込まれる原因事象を示す）

- a. 発生 > その木は芽を吹く。 [Ⅰ型]
- b. 消失 > 彼はやる気を欠く。 [Ⅰ型]
- c. 存続 > 町は昔の面影を残す。 [Ⅰ型]
- d. 移動 > 磁石が蹉跌を付けている。 [Ⅰ型]
- e. 使役移動 > その部屋は最新の AV 機器を備えている。 [Ⅱ型]
- f. 使役移動 > 太郎 <sub>i</sub>は顔 <sub>j</sub>に墨を付けている。 [Ⅲ型]

(4e, f) の分析を踏まえて、単他動詞と複他動詞と自動詞の三者間の構文交替現象を分析する。そこでは「着る・着せる」、「知る・知らせる・知れる」、「見る・見せる・見える」、「聞く・聞かせる・聞こえる」が共通の枠組みで分析できることを示す。さらに、与え手と受け手がセットになった「教える」「教わる」のグループがどのような事態把握によって生まれるのかを分析し、「太郎が花子 {から／に} 英語を教わる」ではなぜ二格が出所を示すこともできるのかが場焦点化他動詞文の観点から論じられる。

所有の概念化は、モノの状態にも拡張されて (5) に挙げた他動詞構文が③の構文として分析される。「全体-部分」「主体-側面」「所有者-(分離可能) 所有物」の二者関係における「全体・主体・所有者」が場として把握され、「場が属性を所有する」へと拡張すると考えることによって、状態変化が原因事象として読み込まれる動的な事態の把握にも拡張する。そこでは、外部に原因が存在しているが変件事象が焦点化する I & II 型が導入され、モノとモノの使役連鎖に基づく事態把握による有責任性の視点と、モノと場の二者関係に基づく事態把握による場の変化 (= 主語名詞句の特徴付け) の視点の < 接点 > として立ち現れる構文であると位置づけられる。

(5) 状態変化 >

- |                                       |             |
|---------------------------------------|-------------|
| a. その木は地中深く <u>根を張った</u> 。            | [ I 型]      |
| b. 台風は次第に <u>勢力を強め</u> 、九州に上陸する見込みだ。  | [ I 型]      |
| c. チョークは (彼の手の上で) <u>折れて粉を散らした</u> 。  | [ I 型]      |
| d. 花子は先月 <u>母親を亡くした</u> 。             | [ I 型]      |
| e. 崖から落ちて、車は原型をとどめないほど <u>形をかえた</u> 。 | [ I & II 型] |
| f. 太郎は、台風で愛用の <u>サーフボードを折ってしまった</u> 。 | [ I & II 型] |
| g. 花子は、隣家から出た火事で <u>自宅を全焼した</u> 。     | [ I & II 型] |
| h. 次郎は、兄に殴られて、 <u>前歯を折った</u> 。        | [ II 型]     |

モノと場の二者関係の概念化の枠組みでは、移動補語をヲ格名詞句によって示す移動事象も分析対象になる。場が焦点化されてヲ格名詞句をとり言語化されるのは、(6) に示した二つの事態把握によると仮定する。(□は際立ちが与えられた語であることを示す)

- (6) a. 場 (z) に□モノ (y) が存在する → a'. □場 (z) が□モノ (y) を所有する  
 b. 場 (z) に□モノ (y) が存在する → b'. □モノ (y) が□場 (z) を占有する

(6a') は上で分析対象とされた他動詞構文を作る概念である。場に第一の際立ちが与えられ、モノに第二の際立ちが与えられるので、これを反転型の場焦点化他動詞構文と呼ぶ。一方、(6b') では主語位置のあるモノが際立ちを与えられた場との関係を強化していると考え

られるので、これを「占有」と呼ぶ。これによって作られる場焦点化他動詞構文を強化型と呼ぶ。

所有に動的な事態把握の鑄型を認めたように、占有にも動的な事態（＝移動）を把握する鑄型を認め、「場を占める」から「場を離れる」「場を移動する」へと拡張すると仮定する。この仮説に基づいて、自動詞の形態のままヲ格名詞句をとり移動の概念をもつとされる「太郎が席をかわる」を分析する。さらにその拡張事例として「太郎が仕事を終わる」「太郎が答えを間違う」も分析される。

第4章の最後では(7)に示したような「介在性の表現」(佐藤 1994)が分析対象となる。多くの先行研究がモノとモノの使役連鎖だけをベースに分析するのに対して、本論文では使役連鎖の事態把握と、モノと場の二者関係に基づく事態把握の両方の＜融合＞によって生まれる構文であると分析される。

- (7) a. 太郎は病院で注射をした。(注射をしたのは医者)
- b. 太郎は丘の上に家を建てた。(建てたのは建築業者)

モノと場の二者関係をモノとイベントの二者関係に拡張することによって、統語的なヴォイスとのつながりも分析対象となる。そこでは尾上(1998-1999)が主張するラレル述語文に共通する出来スキーマを踏まえ、ニ格で示される場とイベントの発生する場の二つの場とイベントの関係に注目したスキーマを提案する。これによって自発文・可能文・受身文・使役文・受益文がどのような事態把握なのかが分析され、介在性の表現がその中に位置付けられる。

第5章では、モノと場の二者関係の概念化を少し別の角度から見る。まず、場の焦点化によって際立ちが与えられた場が主語位置に来る点は第4章の研究対象と同じだが、他動詞構文ではなく自動詞構文を作るものを考察する。これは英語で SWARM 型の場所格交替(Levin1993)と呼ばれるもので、日本語では同一の動詞を用いた構文交替は非常に成立しにくいことを確認し、その原因を探る。次に、場の焦点化によって際立ちが与えられた場が主語位置ではなく、目的語位置に来る構文を考察する。英語で SPRAY/LOAD Alternation、日本語で壁塗り交替と呼ばれているものである。本論文では、所有の概念化という視点から先の SWARM 型の場所格交替との共通点を探り、日本語の場所格交替をする動詞の偏りを指摘する。それを踏まえて「壁をペンキで塗った」が成立する一方で「パンをバターで塗った」が成立しない原因を考察する。

第5章の最後では、三項述語でモノの移動を表す構文を、モノと場の二者関係の概念化の点から三つの分類し、(8)～(10)に示した文成立の可否を論じる。そこでは強化型と反転型の場焦点化他動詞構文を区別することの意義が確かめられる。各例文の(a)は使役場所変化他動詞構文、(b)は使役位置変化他動詞構文、(c)は場焦点化他動詞構文(強化

型)、(d) は場焦点化他動詞構文 (反転型)、そして (e) は (a) と (c) の受身文である。

(8) 道具の移動

- a. 花子はテーブルを白い布で覆った。
- b. \*花子はテーブルに白い布を覆った。
- c. 白い布がテーブルを覆っている。                      . . . 強化型【成立】
- d. \*そのテーブルは白い布を覆っている。                      . . . 反転型【不成立】
- e. そのテーブルは白い布 {で/に} 覆われている。

(9) Locatum (構成物) の移動

- a. 太郎は水槽を水で満たした。
- b. 太郎は水槽に水を満たした。
- c. 水が水槽を満たしている。                      . . . 強化型【成立】
- d. ?その水槽は水を満たしている。                      . . . 反転型【成立?】
- e. その水槽は水 {で/??に} 満たされている。

(10) それ以外 (通常のモノ) の移動

- a. \*友子は鞆をかわいいストラップで付けた。
- b. 友子は鞆にかわいいストラップを付けた。
- c. \*かわいいストラップが鞆を付けている。                      . . . 強化型【不成立】
- d. その鞆はかわいいストラップを付けている。                      . . . 反転型【成立】
- e. \*その鞆はかわいいストラップ {で/に} 付けられている。

第 6 章では、モノと場の二者関係の概念化に注目するとはどのようなことで、どのような意義があるのかを六つにまとめた上で、第 4 章と第 5 章で分析された場焦点化他動詞構文の全体を示す。そして、自他動詞の構文交替現象はもちろんヴォイス全体の研究にも貢献すると主張する。